



邪神に転生したら配下の魔王軍が
さっそく滅亡しそうなんだが、
どうすればいいんだろうか 4

α L P H H L I G H T

蝉川夏哉

Natsuya Semikawa

アルファライト文庫 

グラン

ドラクウの軍学の師。
その才は**まだ衰えを**
知らない。

エドワード

人熊族の邪神。
天界の無差別格闘技の
元チャンピオン。

オイレンシュピーゲル

唯一神側に寝返った
“**悪戯**”の神。

マルクント

とぼくしん
賭博神。
女神ヨシナガとは
ライバル関係にある。

ギレノール

ひょうじん
ヒラノの友神。情に厚い。

よし なが さ おり
慶 永 佐 織

ヒラノの高校の先輩。
異世界ですてに
神をしていた。

ひら の ぼん た
平 乃 凡 太

元サラリーマン。
異世界に転生して、
ドラクウの邪神
「ヒラノ」となる。

エリイナ

ドラクウの義妹で、
邪神官を務める。
素直で純真。

ドラクウ

大魔王に即位し、
辺境のアルナハより
魔界に覇を
唱えようとしている。

第六章	とある老将の出陣	275
第五章	風雲！ 白鳥城	228
第四章	リザレクション	176
第三章	古手の革袋	122
第二章	悪戯の神の悪戯	59
第一章	袋の鼠、熊を囓む	7

目次



第一章 袋の鼠、熊を噛む

署名を、書き損じた。

筆先が走り、字体が僅かに崩れてしまっている。ドラクウにとって初めてのことだ。獣脂の蝋燭の灯りに照らして字体を確認してみるが、やはり崩れている。横に御璽が捺されていたとしても、これでは正式な命令書として使うことはできない。大魔王の署名には、それだけの正確さが求められる。

執務室に部下を近侍させていなかったことに、ドラクウは安堵した。何気ない所作の一つ一つさえ上手くないかほどに、平静さを欠いている。このような姿を、部下に見せるわけにはいかない。上に立つ者の動揺は、士気に関わる。

不調の原因は、分かり切っていた。邪神だ。

邪神ヒラノが倒れて、既に二日が経っていた。容態は、芳しくない。原因は信仰の不足によるものだ。信者が魔法を使うと邪神の持つ信仰——徳が消費される。徳が不足すれば、邪神は力を失い衰弱するのだという。

ドラクウはこれまでに、そういう話を一度も聞いたことがなかった。大魔城に収蔵された書物で読んだ記憶もない。パザン市に連れてきた文官たちも何も知らなかった。邪神官であれば何か知っているのかもしれないが、その長である義妹のエリイナを今回の遠征には同行させていない。

魔族に肉体の限界があるように、邪神にもまた限界がある。言われてみればそうなのだろうが、今のドラクウにできることは少ない。

邪神ヒラノを快復させるためには、徳が必要だという。その方法は二つ。

一つは信者による魔法の使用を止めること。そしてもう一つは、ヒラノに徳が集まるようにすることだ。ただしその徳の源になる信仰は、魔族のそれではなく人族のものでなければならぬ。

魔族にヒラノ信仰を広める方法なら、幾つもある。邪神殿を増やし、邪神官も優遇する。だが、人族相手に広めるとなると、取り得る手段は限られてくるのだ。

ドラクウは、机上の小刀を手にとった。

書き損じの署名を削り、新たに書き直すためだ。書類に使う洗皮紙は厚く、こういうことができた。本来であれば、署名の書き換えは手続き上の問題を生むので避けなければならない。しかし、今は新たに書類の書き直しを命じる時間さえ惜しい。決裁しなければならぬ仕事が出積しているのだ。

ドラクウ率いる一万の軍は、ほぼ太過なくパザン市を掌中に収めることに成功していた。都市の北方にある支城の一つがまだ頑迷に抵抗を続けているが、一両日中には陥ちるはずだ。寄せ手を任せてある〈青〉のダグダの報告には、守将の名すら記されていない。たまたま、戦意の高い些だったのかもしれない。

パザンはかつての宿敵〈淫妖姫〉バルミナが支配していた城だが、今は無主になっている。

魔界南部を安定させるには、この都市を一刻も早く自領に組み込まなければならない。パザンは〈ジオナンの赤い森〉の北限にある。魔界の他の地域からドラクウの基盤である魔界南部へ向かうには、リザードマンの沼地がこのパザンを経由するしかない。内海を船で渡るといふ方法もあるが、遠浅の上に岩礁が多く、大型船で乗り付けることは不可能だった。つまりパザンをしつかり押さえれば、南部を完全に切り取ることができるのだ。

まずは魔界の南で兵力を養い、そこから北上して魔都を窺う。これがドラクウの戦略の基本となっていた。

その支度が整う前に〈北の霸王〉ザーディシユが攻めてくるのであれば、このパザン市が最前線になる。それまでに住民を慰撫し、〈大魔王〉ドラクウの民としなければならぬ。口で言えばたった一言だが、それが難しかった。しかも、掛けられる時は有限なのだ。加えて、邪神ヒラノのことがある。

人族に、邪神を信仰させなければならぬ。魔族と同じように、人族も色々な神を信じている。そういう話は、新たに将として迎え入れたクオンから聞かされていた。

その信仰の中に、ヒラノへのものも何とくして紛れ込ませることはできないか。それをドラクウはずっと考えていた。

ヒラノは、ドラクウの邪神だ。だが同時に雷の邪神としての側面もある。

義妹のエリイナと相談して、邪神殿でもそのように祀るようにしてあった。

同じようなかたちで、ヒラノの属性を広げることではできないだろうか。そのようなことが可能なのかは分からなかった。だが、試してみる価値はあるだろう。このまま座視していれば、あの気のよさそうな邪神は消滅してしまうかもしれないのだ。

「ッ！」

左の人差指を、浅く切った。考えごとをしながら洗皮紙を削るものではない。玉になって滲む血を、ドラクウは口に含む。痛みはそれほどでもない。だが、切った角度が悪かったのか、血はすぐには止まりそうもない。

政務への集中を欠いていたのだから自業自得だ。そう自嘲しつつ、ドラクウは机上の置き鈴を鳴らした。手当てが必要だとも思わなかったが、後でラ・バナン辺りに見つかって過剰に心配されるのが億劫だ。

「主上、お召しになられましたか」

扉の側に控えていたのだろう。間を置かずに入ってきたのは、ドラクウの側室でもある竜裔族のラーナだった。服に焚き染めてある香が鼻腔をくすぐる。香りは、毎日変えていくようだった。

「ラーナか。すまん、少し指を切ってしまったな」

「ああ、主上。それはいけません。拝見いたします」

そう言って傍に歩み寄ると、ラーナはドラクウの指先を躊躇うことなく口に含む。温かさと女の舌先の感触を束の間愉しんでいると、気付けば傷の痛みは消え去っていた。

「ご無礼をいたしました、主上」

「いや、良い。これも竜裔族の力か」

「はい。竜の裔の血、唾液、体液には治癒の効果がございます」

ラーナの唇から離れた指先を二度、三度屈伸させてみる。痛みも傷も、嘘のように消え去っていた。まるではじめから傷など負っていなかったかのようだ。

「大したものだな、竜裔の血は」

「このようなことでしかお役に立てず、心苦しい限りです」

言いながら俯いてみせるラーナの頬を、ドラクウはそっと掌で撫でる。

「ラーナには助けられている。これからも、余を支えて欲しい」

「畏まりました」

「早速だが、ラーナの知恵を一つ借りたい」

「……ヒラノ様のことにございますね」

「ああ、そうだ」

ラーナの答えは、明快だった。

「城市を築きましよう」

城市を築き、人を住まわせる。そのことはドラクウも考えていた。だが、場所が問題だ。机上にある魔界の地図の一点を、ラーナが指差す。それはドラクウの思いもよらない場所だった。

「そこは、河だ」

「はい、主上。魔界と人界を隔てる河の中洲と兩岸とに、一個の城市を築きます」

「そこに人を住まわせる、ということか」

「魔も人も、住まわせません。ここに城市を築けば、塩も馬も米も、これまでより格段に運びやすくなるはずですよ」

邪神ヒラノの助けで、今やドラクウの陣営は、人界との初歩的な交易を始めることができています。それを本格的なものにするためにも、この場所に城市を築くことは意義があるようにドラクウには聞こえた。

「そこに人が住まうようになれば、ヒラノ様を信じる者も出てくるか」

「畏れながら、ヒラノ様を商いの神として祀ることを考えても良いかもしれません」

「商いの、神」

「ええ、塩の柱を持ち帰り、アルナハに商いの道筋を付けられたのは他ならぬヒラノ様です。人族が自分たちの商売の神を勧進するより前に、この城市ではヒラノ様を祀るように邪神殿も建立してしまえば」

「なるほどな。しかしそんなことができるのだろうか」

「試してみる価値は、あると存じます。何もせず手を掛けているよりは、余程」

「……それもそうだな。ただ待っているというのも、余の性に合わぬ」

恭しく頭を垂れてみせるラーナの頭に、ドラクウはゆっくりとその掌を載せる。

「よし、やってみよう。パザンを掌握し、北への備えを整えることと並行して取り組むということになるが」

「微力を尽くします」

ラーナの声には、決意が感じられた。

何ができるのかは分からないが、今はただ動いていたい。ドラクウは、そう思った。

× × ×

とにかく、早く終わらせてしまいたい。(青)のダツダは自分の掌に何度も拳を打ち付けながら、眼前に聳える砦を見上げた。

パザン市の接収自体は、快勝と言っても良い。呆気ないと感じたほどだ。問題は、たった一つ残ったこの砦だった。小高い丘の上に築かれた石造りの砦は「淫妖姫」パルミナの統治時代のもので、堅牢な造りになっている。

パルミナが北からの侵攻を恐れていたことは、この砦を見ればよく分かった。

魔界南部を覆う広大な森林地帯はパザンを境にして終わり、ここより北は見渡す限りの草原地帯、(西)の獣王の領域となる。

パザンがまだ人熊族のものであった頃、南下して掠奪を働く獣王の騎兵は大きな脅威として捉えられていた。小競り合いはしばしば流血の事態にも発展している。

その騎兵に備えるため、パルミナは市の北に防衛線として幾つかの砦を設置した。ダツダが手を焼いているのはその最後の一つだ。

砦を攻囲する兵の士気は、低くない。人熊族にとってパザンは故郷だ。この砦を陥とさえすれば、かつて奪われたものが戻ってくる。そう思うと、意気が高まるのも自然なことだ。

しかし、どうにも攻め切れない。頑強な抵抗があるわけではないのだ。ただ、手応えがなかった。

ダツダには、本格的な城攻めの経験がない。元は森で狩人のような生業をしていたころを、ドラクウに拾われたのだ。それが戦場での働きを続けていく内に、いつの間にか將軍の一人のような扱いとなった。今では部隊を預けられるようにさえなっている。

指揮をできる者が、足りていないのだ。もしドラクウが「廢太子」として落ち延びて来たのでなく、多くの將校を抱えていたなら、ダツダは召し抱えられたとしてもこのような立場にはなかつただろう。

勇気と忠誠では大魔王臣下の誰にも負けないという自負がある。

だが、経験不足の感が否めないのは、ダツダ自身もよく分かつていた。武官の不足も、いつまでも続くというわけではないだろう。ドラクウが大魔王の座に就いたことで、仕官しに来る者もこれから増えていくにちがいない。

今のドラクウの麾下では、文官も武官も等しく頭数が足りていない。だが、両者を比べてみたときに数の補いが付きやすいのは武官の方だった。血の気が多いだけで武官になれるというわけではないが、育てるのに時間のかかる文官よりは集めやすい。

特に、ダツダのような一部隊を任せられる程度の將は魔界には無数にいる。そういう將軍が新たに同僚となつたら、ダツダの価値は大きく下がるだろう。

しかし、自分の地位が危うくなるという風には、ダツダは考えていない。身の丈に合ったことをする。それが一番幸せだということは、森の中の暮らしでよく分かつていた。力

量のない者を頭領にいただいた獣の群れの末路は、悲惨だ。だから、いつか失うかもしれない将の地位には何の未練もない。むしろ清々するという気持ちさえある。一人の兵として戦いたいと、いつも思っていた。

だが今は、困難な砦攻めを指揮しなければならぬ。突撃で傷付き失うのは、顔も名前も知った人熊の兵士たちだ。とにかく、早く終わらせてしまいたい。

「ダツダ殿、もう一度突撃しますか？」

尋ねて来たのは、傍に置いて副官として使っているもう年高の人熊だった。

「いや、小休止を取る。交代で水と糲を摂るように。備えだけは怠るな」

「ではそのように」

伝令に指示を出す副官を見るときもなしに見ながら、ダツダは小さく溜息を吐く。

堅い砦だ。しかし、所詮は砦、という気もする。押せば何とかなりそうなのだが、現実上手く行っていない。見た目は、他の砦と何も変わらないのだ。この砦だけが援軍もなしに数度の突撃を退けている。何かが違うのだろう。

「あの砦の守将は、誰だ？」

「それが、妙なことになっておりまして」

副官の調べでは、この砦の守将はカルキンという人鹿族の男だ。バルミナの配下の中でも名の知れた戦巧者だったらしい。ところがその男は今、この砦にいないのだという。

「守将もいない砦に、人熊の兵は苦戦しているということか？」

「中に残った者が指揮を執っているのです。ただ、カルキンもその副官も、バザンの防衛に呼び出されていたようで、向こうで既に捕虜となっています」

砦の位置付けを考えれば、ここにカルキンのような武将を置きたくなるバルミナの気持ちだが、ダツダにはよく分かった。それほど獣王の掠奪は恐ろしいものだからだ。だが、北上して来ているドラクウの軍に備えて、カルキンさえこの砦から引き抜くような事態になったとき、果たしてまともな戦力を残しておくのだろうか。

「目星は？」

ダツダの問いに、副官は少し答えにくそうにした。

「ハツカ、という主計官が代役をしているようです」

主計官は、文官だ。帳簿の管理や物資の保管を担当する役職の者が戦闘の指揮を執っているのは意外だった。

「主計官が？ 筆を剣に持ち替えたところか」

「いえ、剣はおそらく持っていません」

「冗談を言うな。剣も持たずにどうやって戦を指揮するのだろうか？」

「それが……そのハツカなる主計官、人鼠族にございます」

むうと、ダツダは喉の奥から唸りを漏らす。

人鼠族も魔界に暮らす民には違いない。だが、その中から武将が出たという話をダッダは聞いたことがなかった。

小さいのだ。

成長しても、ダッダの掌に乗るほどの背丈にしかならない。他の種と比べて寿命が短いといったこともないが、そのあまりの小ささから活躍の場はもっぱら文官や商人といった分野に限られている。

そのことを聞いてダッダの胸に浮かんたのは、怒りでも嘲りでもなく、おかしみだった。人鼠に、手玉に取られている。何とも妙な気分だった。

「伝令を呼べ。小休止が終わり次第、再度突撃を行う」

「突撃、ですか」

少し不服そうに確認する副官を、ダッダは睨みつける。

「ああ、突撃だ。人鼠が忠義を見せている。人熊がそれに勝てぬはずはない。忠義と忠義のぶつかり合いだ」

「しかし相手は小勢です。無駄に攻めて被害を増やすのは如何でしょうか」

「その小勢に、ここまで梃子摺らされている」

「分かりました」

ここさえ陥落させれば、パザンの接收は完了する。

早く終わらせて、〈北の霸王〉の侵攻に備えねばならないのだ。

「人熊が、人鼠に負けるものかよ」

伝令が走り、陣地に鬨気が満ちる。この雰囲気、ダッダは、嫌いではなかった。

ダッダに預けられた二〇〇〇という兵力は、かなりのものだ。パザン接收部隊全体の五分の一に当たる。その中には、ダッダの育て上げた人熊の精兵五〇〇も含まれていた。

掛けられている期待の大きさよりも、今は責任感の重さがダッダにのしかかる。この砦だけは、落とさねばならない。俗に攻守三倍の原則というものがある。十分な防禦の施された拠点を押くには、攻め手は守り手の三倍の兵力を用意しなければならない。ただそれはあくまでもおおよその目安であって、あまり当てにならないのを、ダッダは

誰かから聞いたことがあった。事実、主君である〈大魔王〉ドラクウの率いる軍は、その常識をいつも覆ってきた。

単純な兵力の問題ではない。兵力を上手く活かすための方法というものが、確かに存在するのだ。その中には、勇を奮う蛮声を上げての突撃も含まれる。

「些に籠っているのは、三〇〇と言ったところでしょようか」

副官の見立てに、ダッダは小さく唸った。籠城しているのが三〇〇であれば、ダッダに必要な兵は九〇〇でいいことになる。

「どうだろうな。もう少し、隠れていると思う」

いや、隠していると言うべきだろう。既に二度、ダツダは砦に突撃を掛けていたが、何とも言えない得体の知れなさを感じていた。

丘の上の砦は歪な五角形の壁に囲まれている。その五つの面の全てに均等に兵が配されているわけではない。ダツダは南向きの壁を主攻路と定めているのだが、そこに一番敵が集中しているように見える。

ダツダは、精鋭の人熊族五〇〇の中からさらに選りすぐった二〇〇を使って、他の側面にも誘いと牽制の攻撃を掛け続けさせていた。これだけの兵力差で相手が打って出るとは考えにくい。森の中での狩りで培われた用心深さが、この敵に対しては全てに備えるように警告を発している。

「囲まれてなお、数を少なく見せることに、意味があるとは思えません」

「少なく見せているだけではないと思う。同時に多く見せてもいる。あの壁の上を見る」

ダツダの指差した先、南東向きの壁の上にも弓兵の一隊が列をなしている。傍に侍する旗本から張りの強い大弓を受け取ると、ダツダは狙いを定めて立て続けに三矢放った。

狙い過たず、居並ぶ兵の首が三つ、壁外に転がり落ちた。

「お見事！」

「よく見ろ、あれは木偶だ」

首を鳴らしながら、ダツダは落ちた首を指差す。

目を凝らして見れば、それはよくできた藁の人形の首級だと分かった。

壁の上に並べられているのは、槍や弓の訓練で的に使う人形だったのだ。この砦にまともな仕舞ってあったものだろう。

「藁人形を並べるくらいです。あちらの壁の方が手薄なのでは？」

「そう思わせておいて、実はあちらの方がしっかりと守りを固めていたりする。兵の数を少なく見せているのは、その手当をするためだろう」

二度の突撃で、色々なことが見えるようになってきていた。

相手側の守将は、手の内を悟られないように特に気を配っているという感じがする。狡猾な森の獣と対峙しているときと同じか、それ以上の興奮が、ダツダの中には渦巻きはじめていた。何としても、勝ちたい。それは本能にも似た欲求だった。

「攻めるぞ。南西の壁だ」

叫ぶと、ダツダはもう駆け出している。

大弓は手に持ったまま、愛用の戦斧を担いで壁際まで一気に走り抜けた。壁の上からは雨のように矢が降り注ぐが、避けない。素早く動けば却って当たらないものだ。

後から追いついてきた兵が、壁に取りつき始める。南側の城壁で使っていた長梯子が急遽こちら側に運ばれ、立てかけられた。梯子の先は鉤になっていて、上手く食い込ませやれば少しのことでは外れない。

「呐喊！」

大声とともに、ダッダは壁上の敵に矢を射かけた。

今度は確かな手応えがあつて、肩口を貫かれた敵が壁の中に転がり落ちていく。梯子を外そうとする敵を優先的に、ダッダは精確な射撃で射抜いていった。

攻める兵たちは大盾を頭上に構え、一塊になつて壁に近付いていく。梯子を上っている間は無防備だ。だが、一番に城壁を上り切った者には一番槍の榮譽が与えられるとあつて、我先にと兵士たちは梯子に飛びついていく。

上手く行くかと思つたが、敵はすぐに手を打つてきた。覗きのついた、木の板を何枚か張り合わせた盾を持った兵が、食い込んだ鉤を手際よく外してしまつたのだ。

さしものダッダも、細い覗きの間を狙つて矢を射かけることはできない。攻勢は頓挫し、三度目の退き鉦が鳴らされる。

「強い」

単なる人鼠の主計官と思つていたときの侮りは、ダッダの中から消え去つていた。

孤立無援の砦である。中にいる兵の総数は、おおよそ五〇〇ほどではないかとダッダは当たりをつけはじめていた。それが、ここまで粘る。

砦は元々、北からの脅威に備えたものだ。本来の能力を発揮しない南側からの攻撃に対してここまでの抵抗が続けられるのは、ダッダと中にいる守将との力の差が大きく隔たつ

ているからだとしか考えられない。

「後詰を、頼みますか」

副官の言葉に、ダッダは頷いた。

ここで詰まらぬ意地を張つて兵をいたずらに失う愚は避けなければならない。いつかは兵に落ちる身だとは言え、今は將軍としてこの場にいる。であるならば、最善は何かを考えて行動しなければならない。

「バザンに、後詰の要請を。ただし、もう一度だけ突撃を試みる」

「しかし、士気が落ちております」

「全員に後詰のことは伝える。砦のたった一つも落とせなかつた腰抜けの汚名を着たくなければ、後詰が到着するまでにこの砦を陥とさねばならん、とな」

「……御意でございます」

策がない、というのは辛いことだ。ダッダはそう思った。

果たして、この砦を落とし切れるのか。いや、陥とさねばならない。

戦斧の柄に、布を巻き直す。突撃の合図の太鼓が、もうすぐ耳に届くはずだった。

× × ×

「ダツダが負けた？」

鎧を脱いで動きやすいものに着替えるのをラーナに手伝わせながら、ドラクウは表情を曇らせた。報告に来たラ・バナンは跪いていて、表情は読めない。

負けるような戦いではなかったはずだ。

残った砦は一つだけで、指揮官である〈青〉のダツダに預けてある人熊の部隊は、士気も高い。正直なところ、ダツダが攻めあぐねるとは全く予想していなかった。

「被害は大きいのか？」

「いえ、数度の突撃を行うも、攻めあぐねて膠着状態に陥ったとのことです」

「それは、負けたとは言わない」

「はい、しかしここから後詰なしで勝つのも難しいかと」

「そうだろうな」

ダツダは、ドラクウの配下の中でも特に色の付いていない將軍だ。魔都から連れてきた者でもなければ、現地の有力者の後ろ盾があるわけでもない。ドラクウの手で見出したという思いがある。これから配下が増えていく中で、そういう將軍は貴重だった。

どんな組織でも、大きくなれば少しずつ派閥というものが生まれてくる。それは主君である自分であっても統御しにくい大きさに育ってしまう。大魔王の孫として育てられたドラクウは、それが必然のこととして分かっている。

だからこそ、色の付いていない部下は必要なのだ。気の置けない臣下をどれだけ持てるかで、上に立つ者の動きやすさが変わってくると、ドラクウは考えていた。

ダツダをパザン接収で抜擢したのは、そのためでもある。

勇気と忠誠にかけては並びない〈青〉のダツダを、一部隊を預ける将からさらに大きな立場に引き上げてやるためには、細かな手順を踏む必要があった。勲功も、必要だ。

城攻めの経験のないダツダを、試そうという思いもあった。

増援もない小さな砦が、一つ。こういうところで躓いてほしくはない。躓くはずもないと思っで任せた配置だった。経験を積ませるという意味では、いい案だったはずだ。

「砦の守将は？」

「カルキンという人鹿族の将が守将として配置されていたようですが、パザン市の守りに就いていたようで、既に捕らえております」

「ああ、引見したあの男か」

ドラクウはつい先ほどまで、パザンの捕虜からの降伏を受け容れていた。降った者は忠誠を誓わせた後、ラ・バナンと相談して適切な地位に就けてやる。才能を、これまで属していた勢力で選り好みできるほど、今のドラクウ陣営に余裕はない。

〈淫妖姫〉パルミナは、自陣営の主だった者を、全て自分の種族であるシェイプシフターで固めていた。擬態能力を有するシェイプシフターは、その能力故に他の種族から疎まれ

る。だが、それだけに結束は強い。

そのシエイプシフターたちは、ほとんどがバルミナによるドラクウ攻撃に付き従い、戦死するか行方を眩ませていた。今のパザンには、一体のシエイプシフターも残っていない。残っているのは、非シエイプシフターのバルミナ旧臣だけだ。

バルミナに阿ってその地位を得た者が多いという印象はあったが、能力のある者もいくらかは交じっているようだった。

どうしようもないとシユノンやラ・バナンが報告を上げてきた者を除いて、ドラクウはなるべく多くの者と顔を合わせ、言葉を交わす機会を設けることにしている。

カルキンという名は、会ってみる前から目星を付けていた。

諜報を任せてあるダークエルフの魔王、シユノンの報告では、守りが得意なだけの凡庸な将であるということだった。だが、実際に会ってみれば印象も変わるかもしれないと思っていたのだ。

しかし、今にして思うと時間の無駄だったとドラクウは後悔している。目に知性の光がなかったのだ。自分を大きく見せることだけに、腐心している。そういう種類の手合いだった。ああいう者に仕事を任せると、決定的な場面で必ず失敗する。それは運命のようなもので、どうすることもできないのだ。

おそらく、今までは守将という立場がそのことを糊塗していたのだろう。攻められなけ

れば無能が発覚することもない。カルキンとはそういう種類の男だと、ドラクウの目には映った。

降つた者は、使う。可能であれば、厚く遇する。それがどのような者であっても。そういう態度を示し続けることが度量を大きく見せ、自分を有利にすることをドラクウは知っていた。信用は時として何にも勝る武器になる。

だが、これから本格化する（北の霸王）ザーデイシユとの戦いを前に、数だけ揃えるようなやり方をしたくないという気持ちもあった。

自分の目で見て使えないと思つた者は、対ザーデイシユ戦では最前線から外す。

鎖は、力を掛ければ一番弱い輪から砕けるといふ。そういう弱い部分を、ドラクウは自分の軍に作りたくはなかった。

「では、砦に残つた者がダツダに苦戦を強いていると」

「はい。捕虜によると、人鼠族の主計官が指揮を執っているようです」

その言葉を聞いて、ドラクウの表情が曇る。

「……人鼠の名は、ハツカというのではないだろうか？」

「ご存知でしたか？ 人鼠族の指揮官は随分と珍しく……」

「いかん！ ダツダを早く退かせろ！ ダツダでは勝てない」

自身でも驚くほど、ドラクウの声は大きかった。

ドラクウの怒声に、鎧を仕舞っていたラーナまでもが振り返る。
「ハツカは……師兄は、本物の天才だ」

× × ×

四度攻め、四度負けた。
被害が無視できないほど大きくなったので、今は次の突撃を控えるように命じている。
実際に攻撃してみてもダツダに分かったのは、敵の数が見えているよりも多いということだ。それを巧みに使い分けて、少ないように見せかけている。

手薄に見えるところに実は十分な備えがあり、ダツダが攻めたくないと思うところには意外に兵が配置されていない。しかし、裏を搔こうとすると、やはりそこには重厚な守りが敷かれていたりするのだ。

変幻自在などという言葉を、ダツダは使いたくはなかった。

将の怯懦は兵の不安につながる。だからダツダは常に泰然としていなければならぬ。それなのに、この砦を守るハツカという人鼠の守将には、微かにだが恐怖を感じずにはいられなかった。

四度目の突撃など、まるで相手から城攻めの作法を教えられているような気分になさ

なったのだ。ここまで実力が懸絶すると、悔しいとも思わないことをダツダは知った。

「攻撃を、続けますか？」

副官の言葉に、ダツダはかぶりを振った。疲労困憊しているのを気取られぬように、ゆつくりと床几に腰を下ろす。

「止めた、止め。砦が明かない。ああ、囲みは解くなよ。それと、傷を負った者の手当てをしてやれ」

ここでダツダが突撃を強行しようとしても、大した効果は得られなかっただろう。それほど兵は疲れ切っている。

御意とだけ答えて、副官は処置に走った。その背中を見ながら、ダツダは不思議と清々しい気分にも包まれている。

戦争が、面白い。

そうダツダが感じたのは、これが初めてのことだ。

これまでの戦いは、信仰のため、忠義のためのものだった。それがよいとか悪いではなく、戦いの理由はダツダの外にあったのだ。

だが、今日の戦いはどうだったか。

森の中で獲物を追うときのように、智と技を較べ合う。その楽しみが確かにあった。掌に、強く拳を打ち付ける。

敵將の顔を、見たい。そう思う前に、ダツダはもう床から立ち上がっていた。旗本を五人だけ連れ、ダツダは城壁の下まで歩いていく。

よく狙わずとも、矢の当たる距離だ。だが、相手は一矢たりとも射ってはこない。代わりに、城壁の上で小さな影が動くのが見えた。

「やあ、お前さんが寄せ手の大将かい？」

想像していたよりも、少し間の抜けた声が降ってくる。人鼠族だ。

「そうだ。〈大魔王〉ドラクウ様の家臣、〈青〉のダツダだ」

「ほお、岩を斬ったというあの〈青〉のダツダが」

この人鼠が自分の名を知っていたことを、ダツダは少しだけ嬉しいと思った。戦で勝てなかった敵に対して抱いている感情かどうかは、よく分からない。

「私はハツカ。ここの主計官を任されている。〈青〉のダツダに会えて嬉しいよ」

「相手にするには少々不足だったようだな」

「まさかまさか。こつちはただの主計官だよ。ここまで自分でもよく持ち堪えた方だとは思うけどね。あと一回攻撃されたら拙かったんじゃないかな」

それが本当かどうか、もう一度突撃して確かめるという気はダツダに起きなかった。

そう思いさえしないよう、完膚なきまでに叩きのめすための四度だったという気もする。両者の間に横たわる実力の差は、それほどに広く、深い。

「最初から、四度だけ攻撃を受けると決めていたのか？」

「買ひ被りだなあ。確かに、四度で済めばいいと思ったのは事実だけどね。そう上手い具合に相手の都合まで操作できるわけじゃない。結果としてそうなっただけだよ」

「そういうことなら、そうしておこう」

わざわざ手の内を見せるような真似はしないのだろう。

それにしても不思議な男だと、ダツダは思った。

他愛ない会話だが、もつと続けていたくなる。そういう雰囲気のある男だった。この男と、なぜ戦っているのか。それが分からなくなりそうになる。

「ハツカ。いや、ハツカ殿」

「なんだ、〈青〉のダツダ殿」

「降伏してくれ。この通りだ」

頭を下げるダツダに、ハツカが驚いたような声を上げる。

「おいおいダツダ殿、止さないか。將軍というのは、そうむやみやたらに頭を下げるもんじゃあないよ。特に敵になんて頭を下げるのは余程のことだ」

「ならば今が、その余程のことだ。少なくとも、オレはそう思う」

大魔王ドラクウは、この人鼠をどう扱うだろうか。

降った者には寛大な措置を取ることで有名な主君だが、最後まで刃向う者には容赦をし

ない苛烈かれつさも持ち合わせている。慈悲じひだけでは王道わうだは成らなない、ということなのだろう。

「私はね、何も降伏かうふくしないと云いっているわけではないんだ」

「ならば早く降伏かうふくしてくれ。主上しゅじやうには、ドラクウ様には、オレが必ず取り計らう」

「駄目だめだな」

「どうして?」

「別に私も、既に滅ほろんだ〈淫妖姫〉パルミナに忠義ちゆうぎ立てして、砦とりでを枕まくらに討ち死じにするつもりはないよ。ただどね、こちらも主計官しゅけいとして禄ろくを食はんでいた身の上だ。敵に囲こまれてから降伏かうふくしましたっていうんでは、ちよつと尻軽しりがるに見えやしないかね?」

「こうして四度もオレの攻撃を退けて見せたじゃないか! それでまだ不足か?」

「戦果せんかとしては十分なんじゃない? 天下てんかに隠れるところのない勇将ゆうじやう〈青〉のダツダの突撃とつげきを孤軍奮闘こくんふんとう、四度まで退けたなんてえのは、確かに英雄物語えいゆうものがたりの登場人物ていじやうじんぶつのようでもある。でもね、私はまだ降伏かうふくできないんだよ。何と言いっても、主計官しゅけいだからね」

その言葉ことばを聞いて、ダツダには閃ひらめくものがあった。

傍そばにいた旗本はたもとに合図あひづをして、伝令でんれいを呼よばせる。

「バザンにいるラ・バナン様に申し出て、ただちにこの砦とりでの物資ぶつざいに対する守備命令しゅびめいれいを解除かいじゆしてもらえ!」

「物資ぶつざいの守備命令しゅびめいれい、ですか?」

「そうだ。パルミナもバザン市の主しゅだった連中れんちゆうもいなくなっちゃったから、ハツカ殿とのに出でている命令めいれいを解除かいじゆする者がいないんだ。急げ!」

ダツダの命めいに慌あわてて走り出はしり出すとする伝令でんれいだったが、すぐに何者なにものかに呼び止められた。

「その必要ひつやうはない」

声こゑの主しゅを確認かくにんし、慌あわててダツダは拜礼はいれいの姿勢しせいを取る。

「主上しゅじやう、前線ぜんせんまで督戦とくせんにお越しこしいただきましたこと、誠に深く御礼おんれいを……」

砦とりでの制圧せいあつが進すすんでいないことに対する詫わびを述べようとするダツダを、ドラクウは片手かたてで制せいした。その上で、城壁じやうへきの上うへのハツカに向むかき直ただる。

さすがのハツカも、ドラクウには深く頭あたまを下くだげて見みせた。

「これはこれは、大魔王だいまわう様。高いところから失礼しつれいを。ご尊顔そんがんを拜はいし恐悦きゆうえつ至極しごく」

大魔王だいまわうであるドラクウを前に少しも物怖ものおじしない様子ようすのハツカに、ダツダは青褪あおざめた。これでは、不敬ぶけいの咎とがで斬きられても仕方じかたがない。

しかし、ドラクウの返答へんたうは意外いがいなものだった。

「師兄しけい、ご無沙汰ぶさたをしております」

× × ×

成り行きから、ダツダも宴の末席に連なることになった。パザン市には、政庁の他にパルミナの使っていた豪華な公邸があり、宴のための広間も設えてある。そこに市の有力者も招くことで、ドラクウの支配を広く知らしめるのが狙いの宴だ。

〈淫妖姫〉は調度品の蒐集家としても、名を知られていた。その公邸は、全体的に華美な雰囲気を整えられている。飾られている壺一つ取っても、ダツダの鎧が幾つ購えるか分からないような代物はかりだ。

この壺を売って、露店の焼き飯を兵に食わせてやるとしたら、何人前になるだろうか。

美しい骨董品を見てもそんな感想しか思い浮かばないことに、ダツダは自嘲の笑みを浮かべた。〈青〉のダツダという人熊は、心から武骨にできているようだ。そう考えると、武人という生き方は思いの外、合っているのかもしれない。

宴の支度はラ・バナナがしたようだった。

席次のことや食材のこと。細やかに配慮しなければならぬことになる、ドラクウはラ・バナナに任せるのを好む。それは臣下であるダツダから見ても、はっきり分かることだった。

文官と言えば、他にリザードマンのシュリシアや、ドラクウの妃のような地位に収まっている竜裔族のラーナがいる。ドラクウは三者をそれぞれ使い分けようとしているらしい。

政務にはラ・バナナ、行政にはシュリシア、謀略にはラーナ。その中でもドラクウがラ・バナナに最も信を置いているのは、傍から見てもよく分かる。宴は、勝利を祝うために開くという名目だった。

だが、ドラクウにほど近い席にハツカが座を占めていることを考えれば、それだけのものではないのは列席する者なら誰でも気が付くはずだ。

ラ・バナナは、ドラクウに近い席をダツダにも勧めたが、これは固辞した。ダツダ自身からすれば今回の戦は負け戦で、敗将があまり大きな顔をすべきではないと思ったからだ。ふと隣に目をやると、一つ下座に慥然とした表情の男が座っている。見たことのない鹿族の武将だったので、それがカルキンだとダツダにはすぐに目星がかった。

守りに強い将だと聞いている。だが、ダツダはこの面長な人鹿族の男が、それほど大した力量を持っているように見えなかった。

「〈青〉のダツダだ」

「知っているさ。袋の鼠を潰し損ねたダツダさんだろう」

カルキンの吐く息は、既に酒の匂いが強かった。

よく見れば、目もどろりと酔いに濁っている。

「袋の鼠というのは、ハツカ殿のことを言っているのか？」

「殿なんてのは止せ。あれは人鼠で、主計官だ。それに、胡散臭い」

「自分よりも優れたものには、敬意も払う」

「なんだ、自分が負けたから、あのおかしな人鼠を少しでも偉く見せようっていう寸法か」

「そういうことではない。ハツカ殿は、確かに強い」

ダツダと戦っているときも、ハツカは全力ではなかった。まだ底知れない余裕のようなものがあるのを、ダツダは感じたのだ。ドラクウが来なければ、あのまま一〇日でも二〇日でも持久しただろう。

ハツカに抱いている敬意を嘲笑うかのようにカルキンは続けた。

「強いことは分かる。それは認めよう。だが、妙だとは思わんのか？ 天下に名高い〈青〉のダツダ様を捻ることのできる名将。それだけ強いなら、何故武将として仕官しない？ その機会はあったはずだ。奴には何かある」

「人鼠族だから、ではないのか」

人鼠に対する侮蔑は、どこにでもある。ただ小さいだけなのだが、そこにどうしても卑賤な印象を重ねてしまうのだ。ハツカと戦い、叩きのめされる前のダツダも、そういう視線を全く向けていなかったと言えば嘘になる。

「それはない。それだけはないね」

カルキンが強い口調で否定したので、ダツダは改めてそちらに向き直った。上座に半ば

背を向ける格好になるが、仕方がない。

「どういうことだ」

「このパザンを治めていたバルミナっていうのは、評判の通り確かに毒婦だったさ。だがな、種族によって区別したりはしなかった。人鹿でもゴブリンでもケンタウロスでも、もちろん人鼠でも、仕事ができれば平等に使うところがあつたんだ。一番おいしい仕事はシエイプシフターが占めていたが、それ以外では差別なんていうものはなかった」

「そういう評判は初めて聞いたな」

「もちろん、言い換えはできる。〈淫妖姫〉バルミナは同族のシエイプシフター以外には関心がなかったってな。それを差別と言うなら差別かもしれないが」

「等しく関心がないから、差別なく登用できたということか」

「使われる者にとっては、大層なお題目を振りかざされるよりも却ってありがたい」

「そういう環境故に、ハツカ殿が武将にならなかつたのはおかしいと言いたいわけだな」
カルキンの酔眼に面白がるような光が宿る。

「やつと分かつたか。つまり、あのハツカの野郎には何かあるってことだ」

「………主上は師兄、と呼んでいたが」

「大魔王家の子弟にものを教える指南役は、幾つかの家がある。ハツカは主計官の癖に経理は際立って上手かつたわけではないから、内政の師に仕えていたというのは考えに

「くい」

「戦術、だるうな」

ダッダの言葉に、カルキンが深く頷く。

「そうなるな。デュ・メーメル卿、人山羊族の王族に連なる家柄だ。大魔王家戦術指南役を代々輩出する名門で、当代は〈万化〉のグラン」

「それが、主上の師」

頷く代わりにカルキンは手にした杯を一気に干し、酒臭い息を吐いた。

「妙な話じゃないか。大魔王の孫を鍛える指南役の弟子が、どうしてこんな辺境で主計官の地位に甘んじている？」

「何か、理由があるのだろうか」

「理由？ 違うね、何かの企みがあるのだ。そうに決まっている」

人鹿の将は、嘲りとも咳とも分からぬ吐息を零した。

ダッダの目には、次の酒杯を求めるカルキンの姿がひどく小さく映っている。

カルキンの言葉は途中までは、拝聴する価値のあるものだったが、ダッダの耳には最後まで酷く空虚に響いた。認めたくないものから目を背けるために、自分の内側へと向かってしまっている。そういう種類の言葉だ。妄言には、聞く価値はない。

姿勢を正し、ダッダは上座に視線を向けた。このところ表情の優れないことの多かった

主君が、ハツカと楽しげに言葉を交わしている。

もし、あの人鼠族の将と同じ旗を仰ぐことができたなら、学ぶことは山のようにあるはずだ。そんなことを考えながら、ダッダは杯を傾ける。

カルキンはまだ何か話しかけていたが、もう、気にはならなかった。

× × ×

駒を持つ手に、汗が滲む。

少し寂しくなった盤面を挟んで、ドラクウの向かいにハツカが座っていた。

デュ・メーメルから戦術の手解きを受けていた頃と変わらぬ飄々とした兄弟子の雰囲気、に、時が巻き戻ってしまったのではないかと錯覚しそうになる。

酒宴は終わり、市の有力者たちは既に下がらせていた。今はこうしてただ、兄弟子と弟子として祭りの後の広間で盤上の戦いに興じている。

ちろりと蠟燭の火が揺れた。獣脂の安物ではない。パルミナの命で作られていた、蜂の蜜蝋を使ったものだ。獣の脂を使ったものよりも、臭いと煙が格段に抑えられている。

こういう産品は、魔都に運ばばいい値になるだろう。

「ドラクウ様、他のことを考えられるっていうのは、随分と余裕があたりだ」

「あと何手、師兄に負けずに粘れるかということだけを考えているつもりだ」

「そうかね。では精々愉しませてもらおう」

ハツカの打ち筋は、鋭い。ドラクウも凡庸な打ち手ではないが、一方的に攻められ、凌ぐような戦い方を強いられている。ただ、ここで盤面をひっくり返したとしても、勝てはしないだろう。

兄弟子は、攻めただけではなく守りにも強い。そのことをドラクウはよく知っていた。

「なあ、ドラクウ様」

「師兄、様というのは止めてくれないか」

「じゃあ、陛下にするか？」

「なお悪い。昔の通り、ドラクウと呼んでくれればいい」

「そういうわけにはいかんさ。こう見えて、大魔王家尊崇の念は篤い方なんだ」

ハツカの目が悪戯っぽく輝く。からかっているのが分かって、腹は立たない。昔から、こういう稚気に溢れた兄弟子だった。

「まあいい。それで師兄、何を言いかけた？」

「ん？ ああ、先生のことだ」

「デュ・メル先生か」

「俺たちにとって先生と言ったら他におらんだろう。大魔王家戦術指南役、魔軍騎兵総監、

〈万化〉のグラン・デュ・メル先生だ」

「元気にしておられるのか」

問いながら、聞かなくてもいいことを聞いたと思った。あの矍鑠とした人山羊族の老将がどうにかなるどころなど、全く想像ができない。下手をすると、ドラクウ自身よりも長生きしそうでさえあった。

「ドラクウ様はやはり知らなかったか……先生は投獄された。随分前のことだ」

「投獄？ どうしてまた」

「〈魔太子〉に通じて魔都を擾乱しようとした罪、だそうだ」

「そんな策、余は使っていない」

「分かってるさ。俺の自慢の弟子ならもう少し上手くやる。単なる嫌がらせだろうよ、〈北の霸王〉の、な」

姑息で、効果的な手だ。味方してくれそうな昔馴染に手紙を出したのも、今となっては悔やまれる。そういう動きを、ザーディシユは簡単に察知しただろう。

「それで師兄も魔都を離れたのか」

「ザーディシユから仕官の誘いがあった。あと、レニスからもな」

「レニスからも、か」

〈皇太子〉レニスの動きは、気になっていた。歳はまだ、十六になったばかりのはずだ。

もう十六と言ってもいいかもしれない。過去の大魔王を見ると、もつと若くして至尊しそえんの座に就いた者は数え上げれば限のないほどにいた。

レニスはまだ、目立った動きをしていない。目立たないように動いているだけなのかもしれないが、それは南にいると見えてこなかった。ダークエルフも数に限りがある。探らせているが、深いところまではまだ見えていない。

才能を集めている気配はある。官僚や芸術家だけでなく、軍務に詳しい者にも声を掛けていることは分かっていた。

その中に、ハツカの名前もあつたのだろう。

ハツカとドラクウ、それにシーナウを加えた三者は〈デュ・メールの三つの珠たま〉などとして囃はなされていた。ドラクウがレニスの立場であれば、真っ先に会う。

「シーナウは、レニスに付いたよ」

ハツカが駒こまを指す音が、妙に大きく響いた。

「……そんな気はしていた。何度か、手紙は書いたのだがな」

シーナウは、ドラクウの弟子に当たる。軍人としては魔界でも指折りの名門の出で、ドラクウを好敵手こうてきしゅと見ていたのだろう。何かと張り合つてくるところがあつた。

誘いの手紙への返事は、一通も寄越よこしていない。

「かくて〈三つの珠〉は散り散りとなりけり、というわけだな」

ハツカが、咳せきのように言った。箒はこめられた寂寥せきりょうに、ドラクウは思わず兄弟子の顔を見つめ直す。シーナウはハツカを嫌っていたが、ハツカの方では違っていたらしい。

「師兄しせいは、余よと一緒に戦つてくれるのだろうか？」

ハツカがいれば、ドラクウの採り得る戦略の幅はばは飛躍的に広がる。

バザンの守りを兄弟子に任せることができたなら、ドラクウは自由に動くことができるようになるはずだ。

政治に軍事、自分自身で判断を下すべき部分は無数にある。大魔王の支配する領域全体で通用する法律の制定もしなければならぬ。

人界との境に城市を築くことも、自分自身の手で携たづなわれる。

既に誰に任せるかの構想はあるが、本当はドラクウ自身の手で城市の縄張りなわばりを計画し、建設も差配さばいしたいという思いがあつた。

邪神ヒラノ。

あの邪神のために、可能な限り自分の打てる手は打ちたい。兄弟子であるハツカがいれば、そちらに専念するのも夢物語ではなくなるのだ。

「断る」

しかし、ハツカの口を突いて出たのは、予想もしない一言だつた。

「理由を、聞きたい」

立ち読みサンプル はここまで

俯くハツカに、ドラクウは絞り出すような声で尋ねた。ドラクウの掌ほどの丈しかない兄弟子が、今は妙に大きく見える。ハツカの深い嘆息には、怒りとも呆れとも取れない熱が混じっているようだ。

広間は耳が痛いほどの静寂に包まれていた。ただ、蠟燭の燃える微かな音だけが、ドラクウとハツカの間にある。

「理由か」

「余の、納得できる理由を」

「それは無理かもしれないな」

胸の前で両手で弄んでいた駒を、ハツカは置いた。

何かを言いかけて大きく息を吸い、吐く。たった一言が、これからの生涯を決定付ける。それを、僅かに躊躇っているようにドラクウには見えた。

もう一度深く息を吸い、意を決したように、ハツカは口を開く。

「邪神を、信じているそうだな」

口調は、これまでの長い付き合いの中で最も重い。

ドラクウの真意を窺うように、双眸はしっかりと見開かれている。「信じている」

ドラクウの言葉にも、知らず力が入った。

